



松本道介先生



松本徹先生



山内洋先生



佐藤洋二郎先生



勝又先生による講演

# 「私小説千年史」出版記念会

二〇一五年六月七日  
於：タワーホール船堀 蓬萊の間

撮影／露木尚文



山崎徳子様



庵原高子様



桂城和子様



久保敦子様



山之内朗子様



# 楽しいスピーチが いっぱい!!



塚越淑行様



斉藤秀昭様



坂本良介様



藤田愛子様



名取三江様



# 「私小説千年史」の出版を祝う

河村陽子

少し遡るが去る六月七日、勝又浩先生の「私小説千年史」（日記文学から近代文学まで）の出版記念会が開かれた。

文芸評論家の諸先生、大学教授、作家、各同人誌の方々など四十数名の御参集を得てお蔭様で賑やかに「楽しい会だった」との御感想を頂くことができた祝会であった。会場はといえば私共「遠近の会」が月例会評会を行う（タワーホール船堀）なのだ。地下鉄新宿線の船堀駅前にあるこのビルは江戸川区の文化的複合施設で地上七階、更に百十米余のタワーを備える。比較的新しい大きな施設といえる。結婚式場もあり、その披露宴会場で祝会は行われた。大きな控室が隣接し、受付もゆったり設備できたし会場にはシャンデリアが輝き祝会に華を添

えてくれた。

年初「私小説千年史」が刊行されるや、文芸紙、日刊紙等に紹介記事が次々に発表され賑々しく取り沙汰された。それらは東京新聞の「大波小波」（私小説の源流）、日経新聞の「本の小径」（私小説は民族文学・日本語と歩んだ一〇〇〇年の歴史）で、四十年に亘って私小説を研究してきた勝又氏の「私小説論」を適確に要約して、西欧文学からの影響が今なお強い文学風土に一石を投じている。と。（編集委員宮川匡司氏）

次いで東京新聞（日本語の特色として展開）と題し、歌人の水原紫苑氏が「壮大な志を持った書物である。私小説の源に日記、そして短歌と俳句を位置付け、日本語そのものの特質から私小説が日本独自の文学である事を

示そうとする。西洋近代の虚構の文学に対して常に風下にいた私小説を千年来の日本の「純文学」の座に返り咲かせようという試みなのだ（以下略）」と胸のすくような論評である。

次いで毎日新聞の文芸時評「私小説を巡る論争」田中和生氏、の中で語られ、次いで週間読書人で「私」とはどこで成立するのか。談話調の文体で書かれた根元的な問題提起」と題して千石英世氏がその問題の諸点を語る解説された。

御存知の通り先生は文芸評家家として、又私小説研究に於て活動されておられるが、此の度の「私小説千年史」は確かに現代日本の文学論の上に画期的な視点を提起したと言っても過言ではないであろう。

大正末期に久米正雄らが「私小説」を昇華する論議の中で遠く西行や芭蕉の伝統にもつながる求道的な鍛錬道とする試みが一瞬あったらしい。

しかし其の後戦争に影響された昭和、芥川賞等の設立、戦後の経済、科学技術の発展、情報のグローバル化と大きく社会的変貌を遂げたこの世紀、文学の様相も時代の変化に従って様々に変化し、大正から昭和初期の様な生々しい文学論議は一世紀（八十年位か）近くなりをはりそめたといえなくもない。

日本近代文学第九十一集の「私小説」覚書にも散見さ

れる勝又先生の私小説研究のマグマが一気に噴出したようなこの「千年史」刊行はまさに快挙ではないかと私は思うのである。

又「全作家」の文芸時評で横尾和博氏は勝又浩「私小説千年史」は秀逸である。同人誌に関わる人士、特に私小説の書き手には必読の書である——私小説こそが日本の正統文学である事を論じているのだ——この論により従来からの私小説批判や論争はそろそろ終止符を打たねばならない——と。（抜粋）

大変な大英断の御発言で、若しそうなればもう手を挙げて萬々歳なのだが。

さて前置きが長すぎたが、開会前入口に立たれて来会者を迎えておられた勝又先生のにこやかな楽しそうな御様子が印象的であった。

勝又先生の講演はマイクの調子か聞きとり難かった。後で伺えばそれは「千年史の続きのような話だ」との事。耳に残っているのは夏目漱石の「草枕俳句的小説論」の説明で、斬った張ったの葛藤がなく、ただ美しい感じが残ればよいという説だ。幸にも先生は本号で「千年史」の続きと補筆を行われるようなので先生のお話はそちらを御覧いただきたい。

勝又先生の講演が終つていよいよ祝会に入る。先ず松

本徹、松本道介両先生の祝辞より始まった。両先生は長い間勝又先生他とタグを組まれて「季刊文科」を編集されたお仲間の先輩という間柄、暖かい中に遠慮のないお祝辞を下さり、勝又先生もにこにこ聞いておられた。

次に最近季刊文科の編集に加わられた佐藤洋二郎先生（日本大学芸術学部教授）のお話の中で「近頃の若者はどうも本を読まない、本も読まずして小説など書けるか」というようなお言葉が耳をついた。「本を読まない馬鹿になる」と言われた父の言葉と重なって耳が痛い。

ここで来賓の祝辞が終り、「まくた」の塚越淑行氏の音頭で乾杯となる。彼は「評論というのは読むのにとかくむずかしい感じがするものだが勝又先生の文章はやさしくて読み易い。内容はむずかしいけれど読む人の事を考えて書いて下さっているようで安心して読んでゆけるし、立ち止って考える事もできる」とよく聞こえる声で一言ならず讃辞を呈して元氣よく乾杯の音頭を取った。

中央にしつらえた大きな食台の上にまたたく間にさまざまな料理が運び込まれて山となる。

この料理は松屋サロンが担当している。永井会長の従弟が幹部との事で大いにサーブミスがなされたようだ。料理も今まで「遠近」で行ってきた宴会では一番良かった。立食スタイルでは余り食さない私もこの日はあれこ

さまだがその作品たるや、どうしてどうして実に若々しい新鮮な作風で「遠近」にはファンも多い。勝又先生が「季刊文科」に掲載した『濁いた梢』を「文学二〇一五」の掲載作に推選した、と当日発表された。

「文芸家協会編『文学二〇一五』はその年の文芸各誌の作品から選んだ短篇集だが、藤田氏を異色の作家と紹介した。長寿時代は短篇小説復活か、藤田氏はその象徴的存在、寂聴尼に負けず続けてもらいたい。」と以上東京新聞の「大波小波」より抜粋。

何せ会場は賑かでスピーチをされる方には誠に申し訳なく思ったが、塚越さん曰く「話しかけて来る方に、今あなたの方のお話を聞いてますからなんてお断りできないでしょう」と。それはそうでしょう。皆さんそれぞれお話相手には事欠かない方々ばかり、相当広い部屋なのだが三々五々丁度良い按配で賑やかに楽しい時が流れた。一連の仕事を終えた江間事務局長がほっとして飲物コーナーの傍に立ちワインをおかわりしてきこし召している様がほゝえましい。（その結果二次会では口角泡を飛ばして勝又先生と話をする彼を非常に珍らしくながめた。）

私は自分が日頃から考えている「随筆とエッセー」「小説と随筆の境界」などを先ず読んで我が意を得たりと大いに愉快であった。核心の「日記の国」「歌の国」「日本

れ戴いた。

この間、作家の庵原高子氏をトップバッターとし、三田文学編集主任の山崎徳子氏、大正大学准教授の山内洋氏、文芸学校の坂本良介氏と次々に十余名の方々の祝辞が続いた。

お祝いの言葉は「おめでとうございます」の一言で終る。「私小説千年史」についての御感想も述べられていたのであろうが、どうもマイクののりが悪いのと会場が賑やかなのと両方で残念乍らよく聞きとれない。

山内洋氏は「大正大学に於て久保田正文先生の最後の生徒であり、又、勝又先生の最初の生徒であります。それで現在は大正大学で教鞭をとっております。」と言われた。

久保田先生は「遠近」の前身朝日カルチャーでの小説教室の先生であり、思いがけず懐しい名前を聞く事ができ、一寸お話をしたいと思ったがチャンスがなかった。

坂本良介氏は「遠近」に対して毎号ご丁寧な感想文を送って下さる方である。然もその感想となるや、ばつさりけなす等という事は絶対なさらず好意的な物言いの中に、それとなく考えさせられる事があるという書き振りで、文芸学校を経営されており三、四の同人誌にも関与されておられる。

次に知る人ぞ知る藤田愛子氏、九十三歳の小さなおば

語としての私」などの部分はまた完全に読解していない。ゆつくり時間をとって読み込む積りでいる。

今回の祝会の企画から準備、実行まで諸々の世話をし下された永井会長、難波田副会長、江間事務局長始め当日受付、撮影、其の他を担当して下さった方々に紙面をお借りしてその御労苦を深謝し厚く御礼申し上げます。特に大半の司会を切り廻した難波田さん御苦勞様でした。

最後になりますがお参加下さった方々に敬愛の意を表します。今後何かと交流を深めてゆきたいと希望します。

# 「私小説千年史」の出版記念会を終って

難波田 節子

先年勝又浩先生が秋山駿先生とお二人で監修されたコレクシヨン「私小説の冒険」は、第一巻「貧者の誇り」第二巻「虚実の戯れ」共に大変興味深い本だった。続いて出た「私小説ハンドブック」は、何と一〇九人もの作家を紹介して、読書が楽しくなる本であった。その本に基礎知識として「私小説の起源」という二頁の記事を書かれた勝又先生が、今回ついに「私小説千年史」という一冊にご自分の説をまとめられたのである。

私小説は、短歌俳句と同じように日本語が生み育てた日本の民族文学だという説である。私たちは目から鱗が落ちるような体験をさせられたのだった。この本はきつと日本の文学史に記録される本になるに違いない。是非出版のお祝いをしたいと言う声が上がったのも当然である。

という意見が出て、みんなの賛同を得た。その段階では、先生からどんな話が聴けるだろうという楽しみが先立って、私たちは一日に二度も話をさせられる先生の負担に思いが至らなかつたのだ。何のことはない。先生の出版をお祝いするという名目で、先生の講演会をする計画になつてしまつたのである。

幸い先生が短い話ならしてもいいとおっしゃつてくださったので、それなら「遠近」の会員だけでなく、東京近郊の同人雑誌仲間にも声をかけて、一緒に聴くことにしたらどうだろうという話になつた。私たちと同じように勝又先生の指導を受けている「まくた」の人からも、是非やつて欲しいという声援を得て背中を押されたような心強さを感じ、「季刊文科」の編集委員をしていらつしやる文芸評論家の松本徹先生や松本道介先生、作家の佐藤洋二郎先生にも来ていただくことにした。その上、勝又先生にご紹介願つて、大正大学で久保田正文先生に学んだ山内洋様、法政大学私小説研究室の齋藤秀昭様、鼎書房の加曾利達孝様たちにもいらしていただくことになつた。ごく最近文芸家協会の懇親会でやはり先生からご紹介いただいた作家の庵原高子様や三田文学の山崎徳子様も、お声をかけてみると喜んで参加して下さることになったのである。およそ五十人の方が来て下さること

る。

私たちが先生に教えを受けるようになってからでも、先生は何冊もの本をお出しになつた。が、私たちはまだ一度もそのお祝いをしたことがなかつたのである。何時もお忙しそうな先生を見ているから、わざわざそのために時間を割いていただくのがご迷惑のようで言い出せなかつたのでもある。ところが今回永井会長が、「遠近」の例会に先生が来て下さる日に、講評の後続けて祝会をすればいいのではないかと提案してくれた。それなら改めて日を取つていただくこともないから、先生もお付き合い下さるだろうという話になつたわけである。

そう決まると、ただ集まつて飲み食いするだけではもつたない。せつかくだから先生の話を聴く会にしたい。私たちが「遠近」は、毎月の例会を江戸川区の船堀駅前にあるタワーホールの四階会議室で行つていたので、始めは会場をそのビルの七階にある展望喫茶を予定していたのだが、これだけの方々に来ていただくには少し狭いと思われたので、二階の結婚式場蓬莱の間を借りることに決めた。始めは先生の講演を静かに聴けるように席を決めることにしていたのだが、やはり大勢の人と自由に会話できる立食形式の方が和やかでよかろうということになつて、会場には椅子だけを人数分用意してもらつた。あれこれ迷つた挙句ようやくこの形が決まると、今度は食事のメニューや飲み物などを決めなければならず、江間事務局長は連日会場との連絡に忙殺された。

当日、一時に四階会議室に集まつた私たちは、まず「遠近」五六号の全作品について勝又先生のご講評を聴く。私たちは二度に分けて合評して来た一冊を、先生は三時間かけて一度に批評して下さるのだ。昨晚までに全作品を読んで来て下さるだけでも重労働で、今日は多分くたくたにお疲れのはずだ。それなのに、それから一時間後に出版記念会を始めようというのである。しかも会は先生の講演から始まることになっている。これは大変なことをお願いしてしまつたと、急に心配になつた。

しかし先生はお疲れの様子も見せずにマイクの前に立ち、漱石の「草枕」から説き起こし、梶井基次郎、志賀

直哉と、自分の心理を自然に無理なく描写することによって生命を描いた私小説作家の話をしてくださった。ふつつかながら私は司会を務めさせていたのだが、松本徹先生、松本道介先生、佐藤洋二郎先生、お三人とも快く祝辞をお引き受け下さった。

乾杯は「まくた」の塚越淑行さんをお願いしたが、彼は先生の評論がとてわかりやすい文章であることを強調して、元氣よく乾杯の音頭を取ってくれた。そういう文章の書き方を学ばせていた、だいてる自分たちの幸せを実感し、私もビールのグラスを高く掲げた。

ご馳走は和洋中華が食べ切れないほど並び、飲み物も一通り揃っていて、かなり豪華な晩餐だった。久しぶりの再会を喜ぶ人たちが、楽しそうに歓談を始めた。

その間を縫って、何人かの方にスピーチをお願いした。最高齢の藤田愛子さんの時は、「季刊文科No.63」に発表された「渴いた梢」という作品が、文芸家協会編纂の「文学二〇一五」に選ばれたことを勝又先生がご披露され、盛大な拍手がわいた。

先生ができるだけ大勢の方から感想を聞きたいとおっしゃるので、時間のある限りスピーチをお願いしたが、楽しい時間は経つのが早く、あつという間にお開きの刻になってしまった。永井会長が感謝をこめて閉会のご挨拶をした後、隣の控室で全員の記念写真を撮る。今回も

写真は「遠近」の露木尚文さんである。彼は会の間中ろくに食事もせず、終始記録写真を撮ってくれていた。我慢するわけではないが、「遠近」には様々なタレントが揃っていて、こういう会の時は本当に助かる。

ここは、川を渡ればもう千葉県という東京のはずれだから、遠くから来て下さった方を無理にはお誘いできないが、同じビルの一階に二次会の部屋を予約しておいた。「遠近」の例会の後、よくみんな夕食を一緒にする店である。簡単なサラダを頼んでビールを飲んだりアイスクリームを食べたりしながらゆっくりお喋りする。勝又先生も最後まで私たちの話相手になって下さった。

これで良かったのだろうか。済んでみると、先生の出版を喜ぶ私たちの一方的なお祭り騒ぎだったように思えて来たが、ほんの少しだけ、私たちの感謝の気持ちもわかっていただけたのだろうか。「素晴らしい本が出来て、おめでとうございます」というお祝いの気持ちも、少しは先生に伝わっただろうか。そんなことを考えながら、都営地下鉄新宿線に乗って帰った。

さあ、明日からは第五七号の編集である。

## 日本人の心の源流

「私小説千年史」勝又浩著、の出版記念会は盛況であった。

何日か前に会員何人かで下見した時、結婚披露宴場でもある会場はずいぶん広く感じられ、五十名弱の列席者には少し大き過ぎるのではと誰もが感じたようである。

だが六月七日当日、松本徹氏、松本道介氏、佐藤洋二郎氏、三田文学、季刊文科の方々をはじめ、その他の招待客、同人誌まくた、主催の季刊遠近同人が参列すると、会場はいつぱいになり、いかにも華やかなパーティーらしい雰囲気になった。

永井会長の開会挨拶につづき、勝又浩氏のスピーチがはじまる。スピーチは江古田文学からの依頼原稿になにを寄稿しようか、という話からはじまり、当然のことな

がら、著書のテーマである、日本独自の文学形態でもある私小説の源流にさかのぼることになる。

内容の主流は俳句文学としての夏目漱石であった。漱石がイギリスに滞在し、英文学に影響を受けながらも、なにかだまされた感じがいなめず、やはり日本古来からの俳句、短歌、日記などの文学との落差に矛盾を感じていた、ということである。

そんななかで、数多くある漱石の作品のひとつ「草枕」これが俳句文学といわれるものではないのか、と勝又氏は考察する。この作品にはとりたててドラマがない。人間関係の葛藤、切ったはったがない、自然をまのあたりにし、人間の抱え持つ辛さ苦しみを慰撫してくれる小説。そういう文学が存在してもいいのではないかと漱石は思

花 島 真樹子

ったのかもしれない。

ではこれが何故俳句文学なのか。作中のところどころに句が詠まれてはいる。が、厳密にただせば違うのである。つまり俳句とは自然との交歓をもつ一瞬を、作者の感性で切り取ってみせる。そして短歌は自然との抒情とさらには諸行無常の感。

漱石は自分のなかに根づく日本と、西洋文化の板ばさみにあい、それで「草枕」を書かざるを得なかったのである。しかし、さしたるドラマのない小説は大衆から受け入れられず、以後、西洋で身についた手法で小説を書きつづけたということである。

以上が勝又氏のスピーチの、私なりに聞き取ったおおまかな内容である。そしてそれとは別に「私小説千年史」を読み終えていちばん印象に残った章の感想を書いてみたい。

戦後の余波をひきずっていた昭和三十年をはさんだ時期、学生として過ごした私は当時の若者の多くがそうであったように、欧米の文化に憧れ、文学、音楽、映画、演劇、ファッション、その他もろもろにどっぷりとつかり、そのことを誇りにすら思い、小説にしても映画にしても欧米の作品ばかりに目をうばわれ、惹かれていたのである。日本文化は古い、時代遅れ、軽薄な若者特有の思い込であった。以来、欧米かぶれの影響をひきずり続ける。

私は昔、ニーチェに心酔した時期があり、「我」を追及していくと、どうなるか、多分、行き詰まってしまいかもしれない、ニーチェ最期の作品といわれる「あの人を見よ」の読後、漠然とそう感じたような記憶をもっている。実際、ニーチェは狂気にのめり込んでいったという。

仏教思想の底流には無常観、「我思うゆえに我無し」がある。なんと安心できる思想であろう。この語は日常のわずらわしさをそっと自然のなかに溶かしてくれるやすらぎを感じられる。

世の中を夢と見る見るはかなくもなお驚かぬわが心かな  
西行

こんな心境にはとても到達できないが、この句などが西行について研究し、出版もされている小林秀雄の言う、強靱な「自意識家」の特色、として勝又氏は著書のなかで言われている。

けてきたといっている。

そして今「私小説千年史」を読んで、自分自身もうすうす感じていた欧米一辺倒の偏見をもちに言い当てられた気がするのである。日本人として自分の不勉強きわまらない文学観に大きな一石が投げられた。

むかし、「草枕」を読んでもるで興味をもてなかつたのが、再読してみると、詩心をもつ心優しいひとりの男が画材を抱え、山越えをし、温泉宿に到達し、そこでひとりのエキセントリックな女に出会う様子が、あたかも一幅の絵のように描かれている。そのなげない光景が実に不思議な優美で、こころ安らぐのである。主人公は非人情の旅、つまりは通俗から離れた場に身を置いているのである。

そして、勝又氏の著書にもどると、中ごろに書かれてある「西行の伝統」の章にはずいぶんと感じることがあった。平安の時代に生きた西行はすでに、西欧でいうところの自我の問題、その追及や文学表現が、すでに十二世紀には立派に成熟していたのである。

その何百年か後に西洋では、デカルトの思想「我思うゆえに我あり」の「我」の発見の宣言がなされたのである。つまり日本は西洋より何百年も前に、自我意識を発見していたというわけである。平安時代はすでに近代であった。著書にも明言してあ

「私を探求する文学」初めてのガイドブック

# 私小説ハンドブック

秋山駿・勝又浩監修 私小説研究会編

私小説は日本社会と「私」の変遷を汲み上げ、  
時代のなかの「私」を探求してきた。

日本近代文学の底流として今も生き続ける。

勉誠出版 定価「本体2,800円＋税」